

浄土

monthly JODO

2014
December

12



蓮

門

句

会

テーマ《成道会(臘八会)・除夜の鐘》

第七回

勝崎裕彦

(東京新宿・香蓮寺)

念仏もしみじみとする臘八会

ろうはちえ

もう一つ念仏精進年の暮

除夜の鐘菩提菩提と百八つ

山崎龍道

(熊本天草・遣迎寺)

業深き身でありにけり除夜の鐘

煩惱のしきりに湧くや除夜の鐘

歌合戦に気はとられぬし除夜の鐘

行正明弘

(福岡糸島・正覚寺)

四恩謝しつつ渾身の除夜を撞く

補陀落の沖の無明へ除夜の鐘

除夜を撞く愚者の自覚にほど遠く

佐山哲郎

(東京根岸・西念寺)

臘八の古書店で読む大蔵経

境内の抜け道が好き掃き納め

晦日蕎麦鐘は南都か奥州か

浄土

2014/12月号 目次

連載 法然上人のお言葉⑧	梶村 昇 英訳 河西良治	2
講演概録 仏教の基本思想 (三)	佐々木閑	4
連載 会いたい人 桐竹勘十郎さん②	関 容子	14
連載 響流十方	小村正孝	22
連載小説 渡辺海旭	前田和男	26
連載 友好の絆	森 清鑑	36
連載 誌上句会	選者＝増田河郎子	44
連載 マンガ さっちゃんはネッ	かまちよろう	47
編集後記		48

表紙・【花写】芝崎純子 陶芸家 浅井竜介 撮影 keizo.S

表紙裏＝蓮門句会

背表紙裏＝泰雲の美味探訪



表紙題字＝中村康隆元浄土門主
アートディレクション＝近藤十四郎
協力＝迦陵頻伽舎

法然上人のお言葉

ご法語

およそ聖道門は智慧を極めて生死を離る。浄土門は愚痴ぐちに還かえって極楽に生ず。
(醍醐本『法然上人伝記』)

現代語訳—およそ聖道門は、どこまでも智慧を追求して迷いから離れようとし、浄土門は、本来の愚痴の身に還かえって極楽に生まれようとする教えである。

Honen Shonin's Sayings

In general, Holy Path Buddhism teaches people that they should attempt to seek wisdom all the way and then free themselves from earthly desires, whereas Pure Land Buddhism, that they should attempt to bring themselves home to their original ignorance and then attain their birth in the Paradise. (from *Daigo Edition of the Biography of Honen Shonin*)

解説

どこまでも自分を磨いて、迷いの世界から離れようと努めることは良いことですが、努めても、努めても、なかなかそういう状態になれるものではありません。そしてかえって自分は、そういうものとはほど遠い存在であることに気づかせられます。そう気づいたときに初めて、阿弥陀仏の本願ということが身に沁みて分かるのでしようが、それがまた容易にできるものではありません。

『阿弥陀経』にも「難信の法」と述べられていますが、本当に人間というものは、救われ難い存在と思わずにはおられません。

Commentary

It is good to try to discipline ourselves thoroughly in order to set ourselves free from all delusions in the world. However, even if we repeatedly made the utmost efforts to do so, we would not be able to attain such disillusionment so easily, only to notice that we are nowhere near such an enlightened stage. It is not until we have noticed it that we will fully realize Amida Buddha's Original Vow, but even such a full understanding still cannot be easily gained. The Original Vow is "a doctrine difficult to believe" as was stated in *the Sutra of Amida* as well. In fact, we have no choice but to think that we human beings find ourselves hard to help.

梶村昇

亜細亜大学名誉教授

英訳……

河西良治

中央大学文学部教授

平成二十六年六月二十七日 法然上人鑽仰会主催講演会

仏教の 基本思想

釈尊から始まる(三)

花園大学教授

佐々木 閑



では、仏教という宗教はどういう方法で苦というものを消してくれるのか。生きる苦しみがどうやって消えるのかということです。

消す方法とはいうことで、ここが一番難しいところで、仏教の一番基本の根幹ですから、そのつもりでお聞きいただければと思います。

年をとると病気になるって死ぬのですが、これが人間の生きていくことの苦しみの原点です。これから逃れるためにはどうしたらいいかというと、方法は二つあります。

一つは、年をとって病気になるって死ぬのが苦しいのだから、年をとらなければいい。病気になるなければいい。死んだらだめです。

そして、その道を究めていって、幸せをもたらそうという、それを究めたのが医学ということになります。年をとって病気になるって死ぬことが苦しみなのだと考えて、その苦しみを根底から取り除いてしまおうと考えて生み出したのが医学です。

ですから、決してこの道は不可能な道ではないのですが、ただし、我々の考えとしては、医学という道をおし進めれば人は死なくなる、年をとらなくなるということはありません。

さらにはもろくに死ななくなったら、生きる苦しみがなくなるのかというと、これはますますもって苦しくなるかもしれない。人間というのは、死ねば不幸ですが、生きれば生きるだけ不幸になるかもしれない。

医学の進歩によって、平均寿命は四十年も五十年も延びましたので、私たちにたくさん幸せを与えてくれるかもしれない。しかし、最終的な解決にはならないということです。では、もう一つの方法。老、病、死は必ずくるのだからこれは仕方がない。だから、それをそのまま苦しみのままにしておくのではなく、その変換する場所を考えてみようとい

うことです。

つまり、老、病、死を避けて通れない私たちの側の心の持ち方、物の見方、世界観を変えることによって、この老、病、死から自分の心を守っていいこうということになるわけです。

実は、本来的な宗教の働きはここにあります。本当の宗教とは何かといったときに、老、病、死ということは絶対に避けられない、消すことは無理ということを引き受けながら、それが苦しみでなくなるような心のあり方を、我々に教えてくれるということではないかと思います。

宗教とは単なる人間の社会現象ではなく、人が苦しみながら、もだえながら見つてきた、生きるためにするがためのものです。

例えば、キリスト教もイスラム教もそうです。そういう意味では立派な宗教です。キリスト教やイスラム教はどうやってその老、病、死の苦しみを消してくれるかという、それは神の存在というものを信じるという、その一点において、可能になります。

なぜならば、神の存在を信じ、その神というものが、死んだあとの我々の魂を救って天国へ迎えてくれるという、この考え方でもって、老、病、死を受け入れることができるからです。それによつて老、病、死は苦と感じなくなれるということです。ですから、年をとつても全然怖くないですよ。なぜなら、自分はそのあとに救われるのですから。

これは見事な幸せの道です。そこには何一つ間違いはないし、過失もないと思つておられます。もちろん、そうやって信じる人たちが集団をつくつて、例えば、魔女裁判をするとか、人を殺すとかといひ始めるとだめですが、それは組織の問題です。

組織としてはあるかもしれませんが、キリスト教の本質的な形としては、これはまっ

とうな宗教です。イスラム教もそうです。皆そうです。これはすべて自分の死後の救いを信じることによる老、病、死からの脱出です。

ただ、一つだけ、この方法には決まりごとがあります。それは何かというと、本当にまじめに信じなければならないということです。

そうでしょう。疑いがあったらもとの木阿弥です。絶対に救われるという確信が私たちの心の中に生まれたときにこそ、このキリスト教的な教えはもう万全の力となって我々を救ってくれます。

もちろん、私が阿弥陀様のことを念頭に置いているということも、皆さんおわかりだと思いますが、その存在を信じられない人もいっぱいいます。

お釈迦様がおっしゃった苦しみを転換する方法というのは、これはまたそういった宗教とは別の話です。お釈迦様の考えは、世の中を司っている梵天という絶対的な存在などはないということから出発しています。

つまり、私たちの苦しみを消す方法は、自分自身が実践するという努力の世界だということになります。この努力にもいろいろあります。

老、病、死というものに耐える自分をつくるのだという考え方ですが、耐えるという言葉葉をどう理解するかによつて修行の形も変わってきます。もし、耐えるということは我慢することだというのであれば、我慢力をつけなければならないことになります。たとえば、熱い風呂に入ればいい。火の上を歩けばいい。あるいは、寒い朝に滝に打たれればいいのです。そうすると、そういうものを我慢していくと、忍耐力がつきます。その忍耐力で老、病、死も忍耐するという考え方もあります。

実際、そう考えた人たちが「沙門しゃもん」の中にはたくさんいて、そういう人たちはその道に

進みます。それを苦行と言います。つまり、忍耐力が老、病、死を苦しみに変えないパワーになるという考え方で、それはそれで一理あります。

お釈迦様は違います。忍耐力というものは、我々の老、病、死に対する苦しみを消すものではないと考えました。もっとしなやかに考えたのです。老、病、死に対する価値観をずっと転換していくような形で受け入れていくのが大事だと考えたということです。物の見方を変えるということです。

私たちが外からさまざまな情報、刺激を与えられたときに、その情報をそれまでの自分とは違う形で受け入れられるようにすると考えたわけです。人が自分の心を変えることによって、外からの情報、刺激を別の形に取り込んでいくということは、何か抽象的な話ですが、例を挙げると、非常に簡単な話だと理解していただけたと思います。

道端で百万円拾ったとします。帯封をした一万円札が百枚ボンとあって、それをある人が拾いました。

そのときに、拾う人間には二種類あります。一つは、その人の我、自分のものとする世界の範囲が非常に広い人、簡単に言うところと欲張りな人ですが、おれというのはこんなすごい人間だ、おれはすごい人間で、これぐらいの広がりがある、そして私が手を伸ばしてさわるのは全部おれのものなのだという考え方の人です。

逆に、我の小さな人がいます。その人は、私という存在は世の中の一部に過ぎず、皆がいつばいい、それぞれが生きているのだから、私はその中の一人であり、ほかの人を押しつけた自分というのではない。当然小さいから、私のものとする世界が非常に狭いのです。

ですから、我の小さい人が道ばたで百万円拾うと、その百万円は自分の手の上にあっ

でも、自分のものということにはしない。他人^{ひと}のものだと思えます。だから、これはその人に戻さなければいけないと思って、どうするかといったら、それを交番へ持っていく。交番のおまわりさんは「ご苦労さまでした」と言っ、それを受け取る。

そして、そのあとどうなるかといったら、何も起こりません。六カ月たったら戻ってくるだろうかなどということも考えません。もうそれきりで、この人は家へ帰ってからも、いいことをしたといって、少し幸せな気分になるくらいです。

一方我の強い人ですが、指の先から向こうまで全部自分のものという世界観の人は、百万円を持った瞬間から、この百万円の使い道を考え始めるわけです。車のローンに回そうとか、おいしいものを食べにいったら、旅行して温泉に行こうとか想像します。そして、その百万円をどうするかというと、当然自分の懐に入れようとするわけです。さて、ここからは私がつくった話になります。

その後すぐに百万円をひったくりに取られてしまうのです。そうしますと、その人は百万円を取られてもう何も残りません。「もう少し早く懐に入れておけばよかった」とか、「もう少ししっかりと握っていればよかった」とか、あとでいろいろ後悔します。相当長い時間後悔することでしょう。不幸のどん底という気分です。

ここで、我の弱い人と強い人の初めの状態と終わりの状態を比べてみましょう。実は全く変わっていません。最後は同じことをしたことになります。どういふことかという、百万円拾って、人に渡したのです。

おまわりさんかひったくりかは別としても、拾った百万円を人に渡したわけですが、我の弱い人は幸せになり、我の強い人は不幸になりました。何が原因かというと、それは私というものの世界観の広さです。それがその不幸の原因になるのです。

本当のところ、「私のもの」なんていうものは実は何もありません。全部自分がつくった仮想の世界の中に入れ込んで、私のものとそうでないものを区別しているだけにすぎず、この線引きは全部自分が勝手にやっているのです。

世の中に「私のもの」なんていうのは本当はないのに、それをあると思い込めば、当然のことながら、自然現象として、もともと自分のものではないのだから、それはいつか取られてしまう、どこかへ行ってしまふので、現実私の思いと食い違ってくる、これが真実です。

私のものだと思ひ込んでいるものが多ければ多いほど、そうならなかったときこの悔いと悔恨、苦しみが大きくなるのです。

ですから、お釈迦様はこう言います。「我を広げると不幸になる」と。そこで、ある人が尋ねました。「どれぐらいの大きさがちょうどいいのでしょうか。十センチぐらい、十五センチでしょうか」。すると、お釈迦様は、「我はゼロがいい」とおっしゃった。

すべてのもののために我というものを設定しないということが幸せのおおもとであるとおっしゃった。それは、さっき言った降りかかってきた老、病、死を苦に転換する、その転換装置が我で、それを切ればいいということになるわけです。つまり「諸法無我」です。

「諸行無常」も同じです。これも同じで、すべてのものはいつまでも存在すると思えるから、我の中に入ったものはいつまでも存在すると思ひ違ひをします。しかし、幾らいっぱい入れていっても、入れる端から出ていきます。なぜならば、時間とともに皆衰退していくからです。

やはり現実と自分の思ひ込みのギャップが苦しみのもとで、だから、「一切皆苦」「諸

行無常」「諸法無我」というこの三つが仏教の旗印なのです。我々が認識しなければならぬ大切なことは、見事に仏教の中に言いあらわされているわけです。

こうして、お釈迦様は平等なる法という原理に基づいて、そこを逃れるための方策として、自分の物の見方を変える、価値観を変えらることを主張しました。

その一番の元は、我々が「我」といって、勝手に設定している世界をどれだけ小さく縮めることが大事かということをおっしゃいました。

皆さんも聞いて、なるほどなと思うかもしれません。しかし、家に帰ったら、家族の人から、「今日講演ですっかり別人になっていて、今までのおまえとは全く違う」とは言われなと思います。私の話を聞いただけで人間が変わるなら苦労はしません。仏教は要りません。

人間が持っている不幸のもとというのは、私たちの本能、我というのは本能なのです。それは、生命として我々が培ってきた、しみ込んだ本能なのです。その本能が私たちを不幸にしているのです。先ほど言ったように、生き物であるからです。

ですから、お釈迦様がおっしゃるのは、私たちが生き物として本来的に持ってきた、その愚かな苦しみを生み出す装置を消すのだから、言ってみれば生命の原理に反するようなことをしろと言っているのです。

だから、そのためには何が必要かというと、それは絶えざる努力が必要なのです。これを仏教では修行と言っています。

よく日本の禅宗なんかでは、「カラスがカーツと鳴いたときに悟りました」ということが、おもしろい話として伝わっていますが、それは普通の人がカラスの鳴き声を聞いて悟ったわけではなく、それまで積み上げてきた修行が最後の一線まできていて、その一線を

越えるきっかけがカラスの鳴き声だったという話です。

これはやはりトレーニング、つまり、自分の心をどうやって変えていくかというふうにいつも考えていることが、一番大事だということなのです。

それで、仏教というものは、自分の心を変える、老、病、死に耐えられるような物の見方を自分の中につくるということで、修行僧団というのをつくりました。これがいわゆるサンガと呼ばれる組織です。

ですから、サンガの人たちは全員が同じ目的を持って生活をしています。それは自分の心を変えということです。

変える、変えるといいますが、もうちよつと具体的に言いましょう。釈迦は私たちの老、病、死が苦しみに変わってしまう、その原因となる心の働きを幾つかに分類して考えて、それを煩惱というふうに考えました。

したがって、言ってみれば、煩惱を消すということは、老、病、死が苦しみに変わらないようになってくるということです。しかし、その煩惱は一つや二つではありません。例えば、欲しがるという気持ちも、煩惱ですし、憎しみというのも煩惱の一つになります。それから傲慢、つまり、いばりたいということも煩惱の一つになります。

もっとひどいのは、この仏教が言っている正しい考え方が全然理解できなくて、そんなものうそだろうという思いがあつたら、もう絶対にその煩惱を消すことはできませんから、これが一番悪い。これが、煩惱がよくわからない、理屈がわからない、これを「無明」と言つて、それが煩惱の一番の親分なんです。

これがあると、ほかの煩惱を消すための第一歩が踏み出せないのです。そういう意味で、「無明」は根底にある煩惱の親分であると言われています。

この煩惱を耐えざるトレーニングによって少しずつ薄めていき、消していくというのが、お釈迦様がおっしゃった仏教のサンガの人たちの暮らしになるわけです。

やがてそれは、何世代も繰り返されていき、だんだんそのお釈迦様の教えは次第に細かく分類されて、いわゆる哲学的な体系になってきます。この体系のことを「アビダルマ」と言います。

お釈迦様の教えは、大枠は煩惱を消しなさいというようなことだったのですが、煩惱はいくつあるのでしょうか、それはどんなふうに消せばいいのですか、具体的に我々はどうかしたらその煩惱が消えますかというのを、一つずつ、一歩ずつステップごとに語っていくような、これは悟りのためのマニユアルです。そういうものが生まれてくる。これを「アビダルマ」と言うのです。

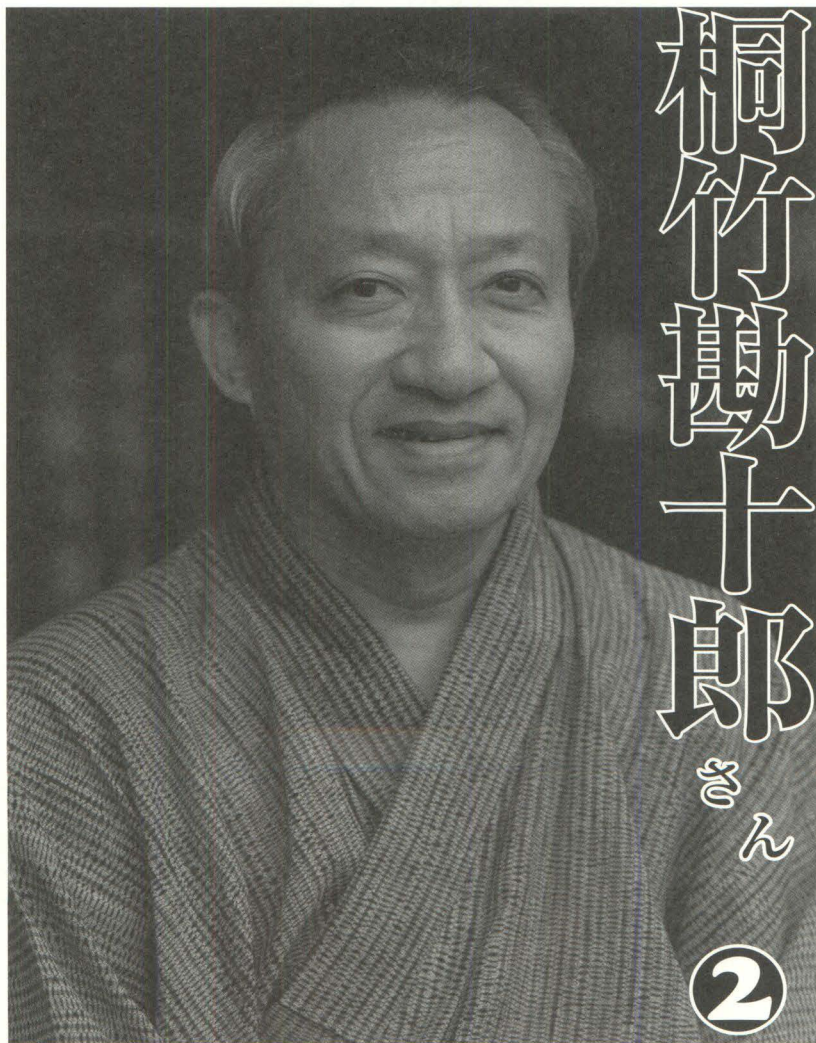
日本にはほとんどこれはないですが、仏教系の大学なんかにはありますし、奈良には、これを専門に勉強するところもあります。

以上、お釈迦様の仏教の一番基本の部分だけ申し上げました。仏教という系統樹の出発点の様子を少しでも説明したわけです。今日の話を土台にして、仏教という巨大な世界に興味を持っていたら幸いです。ありがとうございました。

(了)

連 載

会いたい人 関 容子



桐竹勘十郎
さん

2

撮影／タカオカ邦彦

勘十郎さんが少年時代について、率直に語ってくれた。

「三月一日生まれの超未熟児なんで、小学校へ入学しても小さいし体力ないし、何にもできへんかったです。特に体育の時間に、ついていかれんかったですね。鉄棒の懸垂はできへん、泳がれへん、走っても遅いし、それで勉強も嫌いやし。たまに姉（女優の三林京子さん）が教えてくれるんですけど、怒るんですよ、こんなもんできへんのかいな、つて（笑）。こっちはいつも漫画ばかり描いてて、将来は漫画家になりたいなあ、と思つてました。姉は活潑で、勉強もできたし、男っぽいし、女学校でも人気があって、後輩からファンレターがいつぱい来るんです。うちの母親は宝塚ファンで、自分は小柄やし、姉に夢を託して宝塚へ入れたかったみたいですが、入つたら絶対立役ですよね」

しかし京子さんはその前にさつさとNHK放送児童劇団を受けてみごと合格し、ラジオ

ドラマに出たりしながら着実に女優の道を歩き始める。

「私は何でも姉のお尻にひつついて行つてましたから、児童劇団も一緒に受けて、書類選考は通つたんですが、面接で落ちました。もし通つて俳優になつて、NHKの大河ドラマなんかに出ることになつてたら、人生變つてたかもしれませんね（笑）。

とにかく内気で人前で話もできんし、姉と一緒に習字とかお茶とか踊りを習つたりもしてたんですが、母はこの子を何とかせんならん、と思つたんでしょう。小学生のころボーイスカウトに入れられて、日曜の朝はもつと寝てたいのにはよこされて、山登りとかしたり、ロープの結び方とかも教わつていろいろ楽しかったけど、でも中学になつてこれはやめました」

文楽人形遣いの道を歩み始めるのは、中学二年になつてすぐだった。

「昭和四十一年の五月、道頓堀の朝日座で

子どもの頃、近所の公園の土手で姉（三林京子さん）と一緒に。



『絵本太功記』が通して上演されて、『大徳寺焼香の段』は真柴久吉やら柴田勝家やらズラリと十役の人形が出てくるのに、そのときの人形遣いが二十七人しかいなかった。それで父親（先代勘十郎）から、友だちも誘って手伝いに来いと言われて、集められたアルバイトが六人。このときに出会ったのが同い年で今も仲良うしてる吉田玉女君です。

授業が終ると朝日座に行つて、黒衣も頭巾もみんな借り物。動きのないときの人形の足をただじつと持つて、動くときになると本物の人形遣いが来てさつと代わる。ほかに人形の出入りする小幕こまくの開け閉めとか、小道具を渡したりとか、いろんな雑用もしました。今思うと先輩方が妙に優しくて（笑）、楽屋でうどんを御馳走してくれたり、プラモデルと一緒に作ってくれたりね。あれは、私をやめさせないように、という兄さん方の魂胆やつたんですね。当時、入門が途絶えてから十年はたつてたんで、下が来ないといつまでた

つても足遣いから脱け出られないわけですから」

その妙に優しかった先輩方の中に小玉兄ちゃんこと、のちの吉田文吾がいた。知性派美人のイーデス・ハンソンとの結婚が話題になり、日本人として大いに男を上げたものだった。

「そのころ朝日座の楽屋へゆかた着て外国詠りの大阪弁の女性がよう来てました（笑）。文楽を知ったことで日本の伝統芸能を外国人が見直したというんで、あのころずいぶん話題になりましたね。小玉さんはうちの簀助師匠より一歳年下で、とにかくいい男で若うてかつこよかつたですからね。

写真が趣味で、普通カメラマンが入れないところから、とても面白い舞台写真を撮ってました。自分で現像もするんで、私にも教えてくれて、うちの押入れで現像したら、現像液が臭いつて叱られましたけどね」

そう言えばあのころ『青い目の嫁はん』と

いう映画を観たが、たしかワイドスクリーンのカラー映像だったと思う。そのハンサムなはずの文楽の人形遣いの役は藤山寛美で、ハンソン役は御当人の出演だった。

中学卒業を前にして、勘十郎さんは進学せずに、文楽人形遣いの道に進みたいと決心する。

「私が、人形遣いになりたいと言ったら、父は即座に、そしたら簀助のところに行け、と言いました。親子ではお互いに甘えが出るんで、父が兄弟のように思っている簀助師匠に預けたいとかねがね考えてあったんやと思います。

師匠にしたらとんだ災難ですわ。兄弟子の息子を一人前の人形遣いに育て上げなくてはならないわけですから、ものすごく責任があります。もし仮りに今の私のところへあのころのグズグズの中学生が弟子入り志願で来たら、絶対断りますね（笑）。しかし私の母か

らも熱心に頼みこまれて、師匠は仕方なく引き受けてくださったんやと思います」

当時簀助師匠は三十三歳。勘十郎さんが最初の弟子ということになる。

「入門が決まって、師匠がうちへ来て父と相談して私の名前を決めようということになったんです。襖の向うから師匠が簀のつく名前を三つおっしゃって、最初に呼ばれた『簀太郎』がええな、と思つてすぐにそう言つて決まりました。

翌年中学を卒業すると同時に正式に文楽の技芸員の仲間入りをして、四月に初舞台を踏みましたが、師匠はあんまり教えないタイプで、言うてわかるもんやない、お前とは身体作りが違う、筋肉のつき方も、指の長さも違う、お前は自分の目と耳で盗んで、自分のものを作り上げていかなあかんのやで、と言われました。ずっとたつてから、玉男師匠に言われたことは、お前のお父さんもお前の師匠もすごい人形遣いやけど、真似したらあ

かん、お前はお前の人形を遣わなあかん、というんですが、これ聞いたときは若すぎて意味がわかりませんでした。でもこのごろはよくわかります。芸は一代、ということ。みんなあの世へ持っていくはるんですよ。生きてるうちにどれだけ盗めるかでしょうね。師匠からはいくらでも盗めと言われるけど、上辺だけ一枚盗めたらいいほうだと思う。奥は深いですからね」

新入り簀太郎の修業時代はかなり厳しいものだったらしい。

「あるとき、うちの師匠やない別の師匠から、お前、神経あるんか？ と訊かれて、何のことかと思いつながら、あります、と答えると、あんねやつたら使い、と言われました。どこに神経が行き届かなかったのかは教えてくれない。自分で探さなといけない。いちいち言われてたんではそこしかわからないし、悪かったら誰かが言ってくれるやろ、と思ってしまう。自分で考える時間を持たないといけ

ないんです。ですから私も後輩にいちいち教えません。

簀助師匠から言われて最も骨身にこたえたのは、私が十七、八のころ、バイクに熱中した時期がありまして、楽屋でも移動中でも専門の雑誌を読みふけてました。そのころまだまだ足遣いもいいとこだった私に、師匠がいきなり梅川（『傾城恋飛脚』新口村の段）の左を持て、と言われたんです。日ごろよお見てるか試されたんでしょうね。当然私は大失敗をしたんですが、それでも楽屋でバイク雑誌の続きを読んでいたら、師匠に見つかって、その本に左の遣い方が書いてあるんか！！って、大勢の前で一喝されました。私の文楽人生でこれほど胸に突き刺さったシーンはありません。ほんとに無神経でした。以来、私は自分の趣味に関するものはいっさい楽屋に持ちこまないことにしています」

文楽人形遣いの厳しい修業は、普通には足

十代の頃、父でもある先代勘十郎（左）に人形遣いを教わる勘十郎さん。右は兄弟子。



が十年、左が十年と言われるが、勘十郎さんの場合、足と左の時代がずいぶん長くて、左遣いを卒業したのは五十歳を過ぎてからだ。「最初のうちは目のやり場に戸迷います。あんまりキョロキョロもできないので、毎日客席の一点を見ることになっていたんです。そして、そこにもいつも座るお客さんがいたんですよ。ある日文楽劇場の楽屋の受付に、こんなもん落ちてました、って和服の女の方が手紙を届けたそうなんです。簗太郎様と宛名が書いてあるので、一応私のところにその手紙が届きました。読んでみると、あなたは毎日私をじっと見つめておられますが、私には夫も子供もある身ですので、困ります、って

(笑)。どうやら届けてくれた御本人が書いたものらしいんですけど、私かてそのときは女房も子供もありましたから、やつぱり困ります(笑)。それからは客席を見ずに、もうちよつと目線を上に持つていくようになりました」

勘十郎さんの結婚は早くて二十三歳のとき。年輩客の地味な色取りの中に、パツと花が咲いたようにきれいな色の和服姿の女性が二人いて、その中の一人がのちの智恵夫人だそうだから、そのころは頭巾の中から客席を見ていたことになる。

「家内は東京下町の佃の生まれで、踊りも習つてましたし、そのころ大妻女学院の学生で、学校の帰りに友だちと二人で歌舞伎座に寄つたりしてて、そのうち国立劇場ができたんで、文楽も観てみようか、となつたんですよです。そのうちに楽屋にも来るようになりました。着物のときもあれば学生服のこともあつて、何しろ当時は女氣のない職場ですから、非常

に目立つんですね。だんだん話をするようになって、しまいには巡業にもくるようになって、まあ、そんなところですよ」

勘十郎さんは今も若々しいのにお孫さんが五人もいる。その名前がみんなユニークで素晴らしい。

長女友紀ゆきさんのところが諷輔ふうすけ、桜輔おうすけ、桃輔とうすけ君。次女友里ゆりさんのところには果乃子かのこちゃん。長男で同じ人形遣いの道を歩いている吉田よしの次さんのところには鼓ちゃんつづみがいるという。

勘十郎夫妻の愛犬、バグの杏ちゃんあんは、何年前かにバレンタインデーにチョコレートを食べて亡くなり、夫妻は当分悲嘆にくれていた。

(この項つづく)

衆生仏を礼^{らい}すれば、仏これを見たもう。
衆生仏を称^{しょう}うれば、仏これを聞きたもう。
衆生仏を念^{ねん}ずれば、仏も衆生を念じたもう。

〔法然上人行狀繪圖〕卷二十三

不可思議であること

また一つ、「大きな謎」の解明が進むかもしれない。十一月十二日、欧州宇宙機関（ESA）の無人探査機が、火星と木星の間に位置する彗星への着陸に成功したと報じられた。もちろん史上初。すでに十年も前にフランスから打ち上げられていたのだというが、露ほども知らなかった。およそイメージ不可能な距離を進み続け、接近、ついに表面に着陸したのだという。

なんでも、彗星というものは大部分が氷でできおり、四十六億年前に太陽系が生まれた時期に地球に激突、生命の起源となる有機分子をもたらしたと考えられているとか。今回の成功が、その「起源」についてさまざまなことが分かるだろうと期待されている。いずれ気の遠くなるような話、しかもこうした分野は悲しいかなまったく門外漢の筆者、テレビを見ていて感心とも嘆息ともつかぬものが、ただ繰り返し返し出てくるのみであった。

こんなニュースも届いた。アメリカの大手IT企業が女性従業員の卵子凍結費用を補助するという。出産のために長期の休暇や退職をして優秀な人材が離れるのを回避するためだ。シリコンバレーの他のIT企業各社も、同様の理由から家族計画のためのさまざまな特典を考えているという。福利厚生に手厚いといわれるそれらの企業だが、これも福利厚生？　こういうことがあたりまえ

のように進められるって……。訝いがしく感じてしまうのは筆者だけだろうか。が、補助を受ける社員からはきつと、こう切り返されるかもしれない。

「研究、技術が進み、出産の時期が選べるようになった。これは私にとって都合だ。今、仕事を休むことは避けられ、会社に貢献もできる。つまりそれは、世の人々の利便性のために貢献できることになる。本人が、会社が、社会が望むことを果たし、各々が恩恵を受けることに、何か問題はある？」

人が踏み込まなかった、踏み込めなかった神秘的な領域は、人間社会の規範を作ることに大きく寄与してきた。しかし人類は、それを暴くことに第一級の評価を与えてきもした。「不可思議」とくくられていたことの多くが「不可思議」でなくなっている。その結果受けられる恩恵は確かに大きいから、そのこと自体、否定もできない。そうした「暴く」作業は知的欲求、利便性向上の意図にもとづく、と言えば聞こえはいいが、現実には横たわっているのは、ときに、もっとどす黒い欲望だったりもする——。頭の中を愚考が駆け巡る。

先述の切り返しに対し、「問題あり」と即答する説得力を持ち合わせていないこと、これもまた、たしかだ。しっくりはこないが。

「これでホッとしました」

先日、ご尊父の七回忌を勤められたお檀家さんが、会食を終え、招いた方々を見送ったあと、しみじみと、かつにこやかに述懐された。年忌法要を勤めたあとで同様におっしゃる方は多い。亡き方を悼む席だったにもかかわらず、その時の声に物哀しさをにじませる方は、稀だ。

亡き人に向けて勤める供養の儀。勤める「こちら側」は、現に今、生きている者たち。そしてその勤めるもろもろの善根を届ける先「あちら側」は、見えず、聞こえず、触れられない、いわば、不可思議、神秘的な領域の存在。

人はなぜ、そうした存在に弔意を送ってきたのか。

それをするのがなぜ、その人に安堵をもたらすのか。

おそらく一つ言えるのは、それが不可思議、神秘的領域のもの・ことだからこそのに違いない。具体的なこと（こちら側）とそうでない領域（あちら側）との感応道交に、相対を超えた価値（それこそ不可思議な）を感じ、見出してきたのだ。知り得ない、ということにこそ、その本領はある。われわれが尊びがちな「知る・知り得ること」をちよつと脇に置き、「不可思議なことがそのままであり続けること」の意義に、あらためて想いを致したい。

（小村 正孝）

小説 快僧渡辺海旭

壺中に月を求めて

前田和男

第五十四回

第二部

ライン
来江の古城遥かなり

盟友・荻原雲来 その4



★前号までのあらすじ

時は明治の中葉。家業が傾き寺に出された渡辺芳蔵は小石川源覚寺住職端山海定の下、十五歳で得度し「海旭」を名乗る。才気煥発ゆえ将来の宗門幹部として浄土宗学東京支校、同本校へ進学を許され、さらに明治三十三年（一九〇〇）、浄土宗海外留学生として、廃仏毀釈で打撃を蒙った仏教再生の興望を担って、当時印度学の拠点であったドイツはストラスブルク大学へ留学。碩学ロイマン教授の薫陶を受ける傍ら、キリスト教改革派、社会主義者らと交わり、社会福祉事業など仏教以外の知見を深める。留学四年目、スイスはバーゼルの万国宗教歴史学会で研究発表、そこで仏教に造詣が深いオーストリアⅡハンガリー帝国元駐日代理公使クーデンホーフⅡカレルギー伯爵と出会い刺激を受ける。ストラスブルクに戻った「半年先輩」で同じ宗門海外留学生の荻原雲来から、ヨーロッパ初の比丘であるニャーナティロカ存在を知らされ強い興味を覚える。一方、当初の留学期限が切れ何とか延長を許されるなか、雲来はケンブリッジ大学の蔵書から仏教聖典『瑜伽論』菩薩地の原典を発見する快挙をなすが、海旭にもそろそろ成果が求められていた。

ホワイト・アスパラを
五月酒で味わう

共にドイツに留学してから早いもので、荻原雲来は五年半、渡辺海旭は五年になろうとしていた。雲来はケンブリッジに仏教聖典『瑜伽論』菩薩地の原典を探り当て、海旭はスイスはバーゼルの万国宗教歴史学会で研究発表を終えて同じくストラスブルクに戻り、二人は同宿のアパートの一室で、夜を徹して来し方行く末をじっくりと語りあった。

雲来は海旭について、この畏友は回り道をしたほうが大きなものを手に入れられるという予感を、いっぽう海旭は雲来について、この畏友には自分にはない一事への一途さで大事業をなす「突破力」があるという思いを新たにした。

それからしばらくして、二人は、恩師のロイマン教授夫妻から会食に招かれた。

場所は、ストラスブルク大学前の料理店

「ゲルマニア」である。値段が妥当なこともあったが料理がうまいので、学生や商人たちで昼夜ともに賑わっていた。日本円にして二十銭足らずで飲み食いできたので（ちなみに当時日本ではそば一杯が二銭、ビール大瓶一本が十九銭だった）、貧乏留学生の二人にとつてもありがたかった（もつとも雲来は酒はめつたにやらないので、もつぱら恩恵にあずかっているのはビール党の海旭だった）。ロイマンはしばしば教え子を誘ってはごちそうしてくれたが、雲来がしばらくストラスブルクを離れて渡英していたこともあり、二人一緒に、それも夫人同伴のロイマン教授と会食するのは久方ぶりだった。

ちょうど五月に入ろうとしていた。ストラスブルクのあるアルザス地方がもつとも美しく爽やかで、また料理も酒もおいしい季節だった。

一同がテーブルに着くと、最初に口を開いたのは、目にしみるような白無垢のワンピース

スに身をかため（海旭は実際に確かめたことはないが）おそらく実際の年齢よりは十歳は若く見えるロイマン夫人だった。夫人はロイマンがベルリン大学時代に知り合ったピアノストで、教授は彼女を溺愛していた。ロイマンは二十年ほど前、二十六歳の若さでストラスブルク大学で教鞭をとりはじめたが、二人の息子にそれぞれ「マヌ（Manu、魚の意）」、「ハリ（Hari、神の名）」とサンスクリット由来の名をつけるほどインド学に傾倒、学問以外では、日常生活の差配はすべて夫人にまかせていた。この日も海旭と雲来はそんな二人の関係をまざまざと見せつけられることになった。

「お二人一緒にはお久しぶりですね。今晚はたっぷり飲んで——」と言いかけて雲来へ目をやり、「失礼しましたわ。オギワラはお酒はお好きではなかったわね。だったらたっぷり召し上がって」今度は海旭に微笑みかけると続けた。「ワタナベはいける口だから、たっ

ぶりと飲んでたつぷりと召し上がってね」

夫が何か言おうとするのを制して、夫人は周囲のテーブルを指し示した。「やつぱりこの季節はあれですわね、あれを食べなくては、わがストラスブルクの春は終わらないし、夏も始まらないわ。ようやく出始めたばかりだから、お二人ともまだですよ。私たちもそう。夫と楽しみにしておりましたのよ、ねえ、あなた」教授がうなずくのを確かめてから、もう一度、隣りのテーブルの皿へさりげなく視線を泳がせた。

隣りだけでなく、ほとんどのテーブルには、大きな皿の上に白くて長いものが五、六本ごろんと乗っていて、横切りにしたパイと、厚切りハムが数切れ、そしてサワークリームが添えられている。フォアグラと並ぶストラスブルク名物のホワイト・アスパラガスである。

確かに美味は美味ではある。でも湯がいたのをハムと一緒にパイには喜んで食べるのを果たして料理といえるかどうかと訝りつつ、

肉党の海旭としては、少々物足りない気持ちだった。それにビール党でもある海旭にとっては、アスパラと相性がいいのはワインというのもいささか気分が乗らない。案の定、夫人が言った。

「さて、ホワイト・アスパラガスには、やはりアルザス名物の白ワインですわ。それも五月酒ボウレでなくては。ねえ、あなた」と同意を求められてロイマン教授は素直にうなずいた。つられて雲来、そして海旭も頷いた。

五月酒マイボウレとは軽い白ワインに砂糖を加え、ヴァルトマイスターという日本の防風に似た可憐な野草を、強い香りを発する開花直前につんでひたしたものだ。この時期、街中のカフェなどでこれを酌み交わすのが当地の習慣だった。

「五月酒マイボウレは、魔事から身をさけることができると昔から信じられていますのよ」と夫人は言った。日本や中国では桃の酒に悪鬼を払う効能があると信じられているが、これと似て



若き日の渡辺海旭（『壺月全集』大東出版社より）

いて、ここストラスブルクでは五月酒は魔女ののろいや悪魔の害を避けることができるとされてきた。夫人は海旭に微笑みかけた。「オギワラには無用でしょうが、ワタナベは飲んだほうがいいでしょうね」

怪訝な顔をする海旭に夫人は言った。「先週、プティフランス街の歯医者^{マイボウレ}の奥方と一緒に緒だったよね」あわててロイマンが制そうとしたが、夫人はかわまず笑みを浮かべながら続けた。「夫人とはお友達でご本人から伺ったわ。あなたのことを随分とほめてらしたわよ。魔事に巻き込まれないように、たっぷり^{マイボウレ}と五月酒を召し上られ」

海旭は大きく頭をふった。「あれは、奥方が仏教に関心があるとかでお話しに伺ったままです。ご主人とは、お互いワグネリアンでオペラ座の常連でして……」

「せいぜいお気を付けあそばせ。あなたは男前で、リーゼントできめたそのなりはとても辛気くさいお坊さんには見えませんもの。片

やオギワラは髪を短くしてお坊さんそのもの。ほんとうにお二人は同じ仏教の宗派のお坊さんなのかしら」と夫人は笑った。

雲来の帰心矢の如し

やがて夫人が注文した、ホワイト・アスパラガス料理と五月酒^{マイボウレ}が食卓に運ばれ、乾杯となった。雲来は形だけつきあつた。ここで初めて教授が会話に割って入り、盃を傾けて卓に戻すと雲来に言った。

「きみにはケンブリッジで大いに私の鼻を高くしてくれて、改めて礼をいう。で、あれからどうだね、ドクター論文は進んでいるかね」雲来は食べかけのアスパラを皿に戻すと、口元をナプキンで拭いてから神妙に応えた。「おかげさまで、ほぼメドがつきつつあります」教授は満足そうにうなずくと、「そうか、そうか。安心をした。これならこの夏までには博士号が取れるだろう。そうすれば目出度く成果をひっさげて国に帰ることができる」

そこで教授は海旭へ視線を転じた。「さて、ワタナベ、きみはどうかね」

いまだにドクター論文のテーマで悩んでいた。というより、実はほかに関心が山ほどあって、論文にかかれないう口実を探しているというのが本心だった。

海旭は居心地の悪さを覚えて口ごもり、ワインのグラスを口に運んだ。と、雲来が畏友の心境を察して場面転換を図ろうと機転を利かせたのだろう、やおら日本語で海旭にささやいた。

「このホワイト・アスパラガスだが、白いクリームよりも、醤油があうかもしれんなあ。食通のきみはどう思う」

「さあて」と海旭は雲来の配慮に内心で感謝しながら返したが、何事かと訝しがる夫妻に気づいてドイツ語に切り替えた。「残念だが、とくに切らしてまった。おまけに妹に頼んで日本から送らせたのだが、なにしろ船で二か月もかかるもんだから餓えてしまつて。醬

油も船酔いするのだろうか」

海旭の洒落に雲来は思わず笑い声を上げた。「そういえば、五年前、貴兄が半年遅れでこの地へ初めてやってきたとき、土産に持参してきた醤油も少々船酔いしていたぞ。でも実にうまかった。聞きつけて当地の日本人留学生が五人もやってきて、米をたいてそれに船酔いの醤油をかけただけであつという間に平らげてしまった。まさにあれは、干天の甘露だった」

ドイツ語で話されても、ロイマン夫妻は会話の意味が理解できずに怪訝な表情で顔を見合わせた。それに気づいて、雲来はあわてて醤油が日本の調味料であることを説明すると、夫人はもらい笑いをもらしながら言った。「あらまあ、たかが調味料で笑いあえるとは、お二人は見かけも性格も随分と違ふのに、なんとも仲のおよろしいこと」

「いやいや、この男は」と海旭は夫人に答えた。「本来はたかが調味料など顧みない学究

一途なのですが、醬油を持ち出すとは、帰国が決まって、帰心矢となったのでしょうか」海旭は雲来へ顔を向けた。「おぬしも生身の人間とわかって、なんだか安心したぞ」

海旭の一言で、せっかく話題を切りかえようとした雲来の企図は水の泡となった。

「黒い森」での ロイマン一家との思い出

ロイマン教授は大きくうなずいて、会話をもとへ戻した。「オギワラはこれで国へ帰ってシヨウユとやらを思う存分食べられるだろうが、ワタナベはどうだ。きみもシヨウユをたらふく食いたいと思わんか。そのためには……」

海旭が居心地の悪さを覚えてまたまた口ごもるのを見て、雲来は再び話題を変えた。「ところで先生、帰国するにあたって先生とのお付き合いを文書にまとめて、後世に残し

たいと考えております」

「そうか、そうか。それはありがたい」とロイマンは満面に笑みをたたえて何度も頷いた。

と、夫人が割って入った。「学問一途のオギワラが書くと、おかたい研究の話ばかりになってしまわないかしら。ちょっと心配ですわ」

「恐れ入りました。奥方、まさに図星です」と雲来は手を頭にやった。「たしかに私は日常の風物に疎い。しかしご安心ください、このワタナベの文才がしっかり補ってくれますから。これは今後のためにと書き溜めてきたものです」と雲来は文字がびっしり書き込まれたメモ帳を開いてみせた。「たとえばこれは、去年、皆で先生の山荘に伺ったときの思い出話です……」

ロイマンは夏にはスイス国境の黒い森（シユヴァルツヴァルト）の農家を借り上げ、そこへ大学の教え子を招いていたが、雲来のメモには昨年の方がこう記されていた。

「独逸大学の夏季休暇は七月よりして大抵十月初旬に渉る。此の間僕等は師と共に、年々スイス瑞西の山続き、黒林（シュヴァルツヴァルト）の簡素なる農家を賃借し、蒼林と緑草と牛羊と清水との間を徜徉し、且つ学び且つ遊ぶを恒とせり」

雲来がドイツ語に訳すと、ロイマンはそれまで浮かべていた喜色を曇らせた。「簡潔でいかにもできみらしい。だが、もうちょっとほら、いろいろ面白いことがあったではないか」

「でしよう、あなた」と夫人も同調した。

「先生のおっしゃるとおりです」と雲来は応じた。「昨年の夏は実に楽しゅうございました。でもご安心を。これをご覧下さい」と言つてメモ帳の同じページに折りたたんであった新聞を広げてみせた。「ワタナベが主筆をつとめていたわが宗門の機関誌に本人が投

稿したものです。二人の文章を合わせれば完璧です」

雲来が広げてみせた『浄土教報』には、海旭のこんな報告記事が掲載されていた。

「先生夫人令息と共に月余此地にあり。（略）今、中学に業を修むる二人の令息は、其蒐集したる各種昆虫の標本を持ち来りて、人工もて卵子より毛虫を孵化し、毛虫より蝶と転化するの实地を説き、其標本を吾等の前に陳列し、甚得色あり。既にして夫人は茶菓の準備成れるを報じ、吾等は先生が書齋に就きて再び談笑に興を加へ、先生家娘を呼びて曰く、『卿、何ぞ遠来の珍客に対して、此地の盛装を示さざるや』と。家娘乃黒森山処女の盛服を着け来りて、吾等に示す。（略）凡そ此地一帯の処女婚嫁するあれば、各村の処女此盛装を着けて式に列なり、一夜踏舞して夜を徹すといふ。先生戯に家娘に謂て曰く、『卿が花冠の女友を宴せむ時の速ならむことを祈

る』と。座客皆珈琲の大蓋を挙げて祝酒に擬し、大に万歳を唱ふ。家娘嬌羞を發し早々室を辞して去りぬ」

夫妻は『浄土教報』を覗き込んだが、呪文の羅列に首をふった。雲来は大意をかいつまんで伝えた。

すなわち、夫妻の二人の息子たちから昆虫採集した標本を見せられて得意げに説明されたこと。その後、教授の書齋で歓談を始める。と、教授は、借家の主の娘を呼び寄せて、遠来のお客のためにご当地黒森（シュヴァルトバルト）の盛装姿を披露させた。教授は当地の結婚式では花嫁の女友達がこれを着て一晩踊り明かすと説明してから、「君にもそのときが早くくること祈る」と娘を冷かした。一同コーヒーの盃を掲げて万歳を唱えたので、娘は顔を真っ赤にしてその場から立ち去った云々。

即座に反応したのは夫人だった。「そうそ

う思い出したわ。庄屋の娘さんの恥じらいようといったら、とってもいじらしかった。私たちもあんな時代があったのね、あなた」教授が年甲斐もなく赤面するのを尻目にして夫人はつづけた。「私たちのことがこんなに面白くも美しく遠い東洋の国に伝えられるなんて、ワタナベ、ありがとう」夫人は身を乗り出して海旭の手を握ると、ピアノストらしい比喩を加えた。「文章も音楽と同じね。主旋律だけでは美しくないし、面白くも楽しくもありませんものね」

ロイマンは大いにうなずくと徐に口を開いた。「オギワラの言う通りだ。二人がかわされば完璧だ。これで大いに安心した」しかし、教授は一拍おいて、残りの白ワインを乾すと、釘をさすのを忘れなかった。「ただしワタナベ、勉強の方も大いにはげましたまえ。いつまでもお国の宗門から仕送りが続くとは思えんからな」

（この項つづく）

御宿とメキシコを結びつけたもの

友好の絆

第七回

森清鑑

秀忠と会見

ロドリゴ一行は、大広間に案内される。五百畳の広さ。大広間といっても二之間、三之間、四之間と続く。畳、豪華な襖絵、天井の装飾。あまりの美しさに驚嘆する。奥の間、一段と高い所に將軍秀忠が待ち受けていた。「帽子を被っていても良い。まずは、こうして、お目にかかれたことを喜びとするが、貴殿らの御宿遭難での悲慘さ、こうむった悲しみを思うと胸が痛む」

ロドリゴは、その威厳に満ちた端正な顔立ち、立ち振る舞いに、身体も大きく見えるオリラを感じる。精一杯の力を込めて、感謝の意を伝える。將軍は、航海の模様や帆船のことなど次々に質問。ロドリゴは、ありのままを丁寧に答える。そして、助けてもらった御宿の人々、大多喜の殿への感謝も述べた。

徳川二代將軍秀忠は、父家康の言いつけを守った素直だっただけの人と評価する向きも

あるが、この人がしっかりしていたからこそ、十五代の長期に渡り、政権を持続できたと思う。そのことは、徳川家菩提寺、増上寺に於ける、江戸時代の秀忠廟の大きさ、豪華さ、存在感、それに別格の扱いに見て取れる。戦災で焼け落ちた將軍廟。もし残されていたら間違いなく国宝である。戦後改葬。「秀忠の骨は他の將軍とは異なり、がっしりと逞しく、武將の面影を残している」と、担当した東大人類学の権威、鈴木尚教授は記している。まだ固まらぬ世を、家康の構想をしっかりと踏襲し、地盤を固めた。これは容易ならざることである。

ロドリゴの胸には、今や、何の懸念もない。「大御所、家康様にご挨拶したいと存じます。そのこと、御認可頂きたく存じます」。すると秀忠は、「道中、あなたの身分に相応しい接待をしたい。その準備も含めて後日連絡するので数日お待ち下さい」。ロドリゴ一行は、晴れ晴れとした思いを抱き、宿に帰った。

將軍との会見から四日経ち、ロドリゴは強烈な印象を持った江戸に別れを告げ、駿河に向けて出発する。物々しい警護。幾つもの堅固で美しい御堀に感嘆し、東海道を行く。馬上、右手に広大な増上寺の山と社を見、これが將軍家の菩提寺であるとの説明を受ける。寺域は西蓮社で切れ、美しい赤羽川の景観を樂しむ。高輪の大木戸を潜ると街道は海沿いを辿る。穏やかな波が押し寄せ、青の中、多数の白い帆掛け船が映える。

東海道

東海道の歴史は古く、遠く奈良の律令時代に遡る。家康は一六〇一年から五街道整備を実施。日本橋を起点とし、京都三条大橋に至る五十三の宿駅と、箱根と新居に関所を設置。一六〇三年には、東海道松並木や一里塚を整備する。したがって、ロドリゴが歩んだ一六一〇年にはこれらが整備されていた。ロドリゴは記す。「道の両側には松並木があり、心

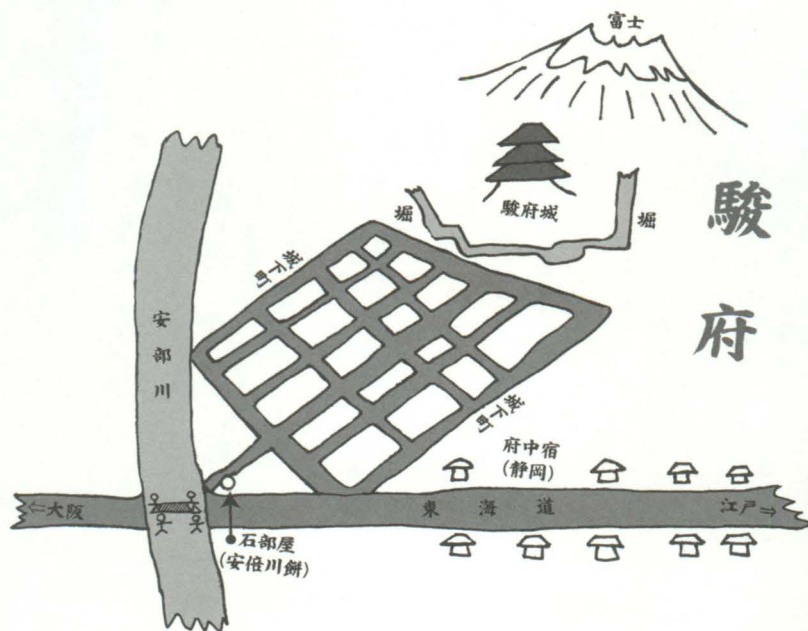
地よい日影を造っている。また里数を尋ねる必要はない。一レグアごとに小山を築き二本の樹木が植えられている。距離は正確に知れる」。「道中、無住の地はほとんどなく、絶えず、通行する人々に会う」。

江戸から最初の宿は品川。海には大きな帆掛け船が漂い、漁をしている。当時すでに江戸有数の漁場で、海苔は特に有名。海岸縁に宿が立ち並び、街道の右側はせり立った崖、八つ山。本陣もあり、ロドリゴはここに泊まったのかもしれない。川崎で多摩川の渡しに乗り、四番目の神奈川宿を越え、保土ヶ谷、戸塚、藤沢宿へ。広い田園の中を松が並ぶ街道を通って平塚宿。所々に民家が密集している。そして酒匂川を渡って小田原宿。北条氏は滅びたとは言え、格段ににぎやかな城下町。ついに箱根の難所にかかる。特に畑宿を過ぎた後の険しい坂道。やがて道は芦ノ湖に向かって下る。箱根関所を通り、三島。富士山が眼前に聳え、ロドリゴを圧倒する。眼下に広

がる海と富士のすばらしい景観、由井。こうして府中宿（静岡駅近く）についに辿り着く。ロドリゴは五日間の旅だったと記す。「將軍の命令もあり、行く先々でとても歓迎され、手厚いもてなしを受けた」。「私はふるさとを捨ててこの日本の地を選びたいほどです」。

駿府

駿府の城下町は安部川に向かって展開している。天正十四年（一五八六）、三河から信濃までを支配することになった家康は、駿府を拠点とし、駿府城の構築にかかる。その完成間近、秀吉による北条征伐の命令。戦が終わると、すぐに、家康は関東江戸に移封される。ただちに家康は江戸の大構築に着手する。恐ろしいほどの決断の早さ、構想力、実行力である。そして一六〇〇年、関ヶ原の戦いに勝利すると、再び、駿府城、城下町の本格的な建設に着手。まず多岐に分かれて流れていた安部川を一本化する土木工事。そこから東



に向かつて商、工、士の順に区画配備。碁盤の目さながらの区画城下町を造る。農民はその周囲に配備。近世の町作りがこの時、初めて行われる。その後、長きにわたり続く江戸の町作りにこの経験が活かされる。南の海縁^{うみべり}を走る東海道をフル活用した設計。駿府城下町は自然を巧みに取り入れた都市建設の最高傑作と評価されている。上方から江戸に向かつて歩く旅人は、大井川、安部川を渡り、城下町に出る。西に対処する設計。旅人の目には、霊峰富士の偉容と、絢爛豪華な駿府城天守が燦然と輝く。駿府城は一六〇七年に完成。直後、火災に見舞われ、焼失したが、翌一六〇八年、再度、天守、御殿が造営された。したがって、ロドリゴが見た駿府城は、この時のものである。この天守も三十年後、またしても焼失しているので、ロドリゴの見聞録は貴重である。(二〇一四年九月、駿府城天守閣復元宣言)

大御所家康に謁見

「府中宿を過ぎて、安部川近くの大手門まで来ると、大御所の家臣が迎えに来て、宿まで案内してくれた。市中に入ると群衆が寄ってきて大騒ぎ。駿府の人口は約十二万人。当時のロンドンの人口が約六万人というから、駿府は大都市である。斜め後方に富士が聳え、城郭に近づくとき天守の威厳が大きくなる。見事な演出。規模は江戸には及ばないが美しい町並み。宿に着くと、大御所家康は、身分の高い人達を着る、豪華な十二枚の着物を届けてくれた」。持参した書記官は、「大御所はあなたの来訪をととても喜び、道中を心配。この着物を着て休養するように」とのこと。至れり尽くせりである。ロドリゴ達は六日間、宿に泊まり疲れをほぐした。この間も果物や菓子が送られてきた。書記官がやってきて「大御所との謁見^{えっけん}はいつにしますか?」。ロドリゴは恐縮して、「それは大御所様次第です」。

すると、「明日二時ではどうでしょうか。家来を数人使わせませう」。城の第一門（大手門）に着く。これを合せて三つの堅固な門を潜る。警護の武士の数は江戸城に劣らない。控えの間にいる。書記官は、ロドリゴを上座に着かせ、しばし歓談。「大御所様は、あなた方を十分におもてなしするように望んでいます」。ロドリゴは応える。「私は、スペインのドン・フィリペ王からフィリピン諸島の統治を任され、その報告をせんと帰国の途中、暴風に会い、御宿で遭難しました。板切れにつかまってようやく浜につきましたが、ここが日本と知り、慈悲深い大王の統治せる処と大きな喜びに変わりました。助かったものの裸同然で、あるのは命だけでした。御宿の人々、大多喜の殿、そして江戸の將軍、さらに大御所の格別の恩恵を受け、生き残った者全て、感謝しております」。「私も大御所様のご厚意には感謝するばかりです。私の君主ドン・フィリッペ王は、世界で最も強大な権力を持つ

ています。この上は、王と信頼、友好関係を結んで頂きたいのです」。それから半時間あまり、隣の二部屋の調度品などを拝見。見事というしかない美しさ。書記官は戻ってきて、「大御所様がお待ちです」。大御所の部屋は、美しく、精巧に造られており、ロドリゴは声も出ない。部屋の中から階段があり、登ると黄金の綱。格子戸に沿っていくと大御所の近くに出る。重臣二十名ほどが跪いている。大御所はビロードの椅子に座っている。そしてロドリゴ達のために同じ椅子が用意されていた。大御所は六十歳くらいの中背の老人だが、威厳のある快活な容貌。沢山の星と半月を刺繍した青光沢の着物を着ており、腰には剣を身につけている。大御所は手を挙げ、席に着くように合図。脱いでいた帽子を被って、いて良いと云う。

「貴殿らの遭難の不幸と苦労には心が痛む。しかし、この国に来たからには、大いに楽しみ元氣になりなさい。ドン・フィリッペ王に

代わって、私が面倒見ましょう。欲しいものは何なりとお申し付けください。必ず与えましょう」。ロドリゴは「大御所様のような偉大な国王から頂いたご恩は、生涯忘れません。必要なものは明日お伝え申し上げます」と応え、感激のあまり家康の手に接吻した。

翌日、大御所の重臣、本多正純を訪問。三つの願いをする。一つ、日本にいるキリスト教諸派の修道士の布教や生活待遇の保証。二つ、ドン・フィリッペ王との親交を深めて頂きたい。王も望んでいます。三つ、そのためには、王に敵対するオランダ人を追放すべきだと思います（当時、オランダはスペインの属国から独立）」。

その翌日、朝十時きっかりに家臣が贈り物持参で宿に来る。彼等は実にきちんと時間を守る。このことは、ロドリゴが日本に来て以来、感心していることだ。城に行くと、重要な話に入る前に、健康を祝い、乾杯してくれ、軽食を頂戴する。

家康は開口一番「このような家臣を持つドン・フィリッペ王がうらやましい。彼は遭難して命からがら助かったので私は欲しいものは何でも与えると約束した。ところがどうだ。金銀物品などではなく、信仰する宗教や国王のために有利になることのみを求めた」。「日本にいる宣教師は今後迫害を受けさせない。また、大いなるドン・フィリッペ国王との友好促進を図る。但し、オランダ人の国外追放については、彼等の保護を約束しているので今は無理であるが、今後の方針の参考としたい」。実に明快である。そして家康は云う。「ヌエバ・イスパニア（メキシコ）に渡りたいなら船を提供する。出発までにかかる一切の費用、金銭も与えよう」。あのウイリアム・アダムスに指揮して造らせた、日本に一隻しかない外洋船を与えるというのである。ロドリゴは衝撃を受け、涙した。



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では
読者の自由な参加をお待ちしています。
詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、
TVウォッチング、紀行文、その他創作等。
あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。
どしどし編集部にお寄せ下さい。

浄土誌上句会

FORUM
浄土の広場

●飯

〔特選〕大書して栗釜飯とある飲み屋

内藤 隼人

栗を味つけして御飯にまぜる、あるいは栗を入れて炊くのだが、飲み屋だから一人分の小釜で、いっぱいやっているうちに、ふつふつと良い匂いがしてくるのだろう。部屋にもガラス戸にも大書してあるのだ。

〔佳作〕埒もなき話は尽きず茸飯

小林 苑子

病みあがり食欲戻る鰻飯

浜口 佳春

松茸は匂いばかりや握り飯

増田 信子

●昔

〔特選〕はらっぱはむかし焼け跡秋の雲

弓月 透

はらっぱは焼け跡だという。草が生えて昔の面影はなくなっているが、いつかあちこちがそうだったように、どんどん家が建ってく

るのだらうなど、いろいろ思いめぐらす。秋の雲がゆつくりと流れてゆく。

〈佳作〉

彼岸花昔の話ばかりする

井口 菜

さんま焼く昔のままの路地の家

早乙女喜栄子

昔むかして始まる童話秋深む

石原 新

●自由題

〈特選〉

がまぐちの硬きくちびる天の川

金井 晶

「天の川」とあるから露店なのだろう。買い物をするのがま口を出す。口金を開けそして閉じる。その形を「硬きくちびる」と見ているのは何とも見事である。「天の川」を使えるような空気の澄んだ土地なのだ。

〈佳作〉

秋の夜の廊下の濡れているような

鈴木 真里

秋の夕部屋にこもりし煮物の香

山口 信子

庭の栗茹でて尼僧にもてなさる

安部 竹影



習字自由題

兼題

浄土誌上句会の
お知らせ

誌上句会〔編集部選〕

■飯

葬列に施鬼飯くばる郷の秋
きのこ飯炊きたてを盛る景德鎮
秋霜の飯豊連峰包み込む
立葵それは飯場に似合ふ花
手甲に飯粒つけて秋遍路
森閑として飯台の柘榴かな
夕飯の最後に梨をひとつ食ふ
飯場から飯場へしろばなまんじゅさげ

■昔

ほのかなる昔の女や藤袴
リハビリは昔ばなしの花野かな
森 懐人

締切・二〇一四年十二月二十日

発表・『浄土』二〇一五年二月号

選者・増田河郎子〔南風〕主宰

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句(何句でも可)と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-1-7 14 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

■自由題

照葉かな昔なじみの友集う
昔から人の集まる檜の森
御本家のむかし縁側吊し柿
都とぶ秋の雀もいまむかし
彼岸花昔の話ばかりする
みみず鳴く昔の絵本めくるとき
糞虫がむかしの色でぶらさがる

強風に身を委ねたる秋桜
老々の二人無言で芋つつく
林檎煮て無垢な時代のパイを焼く
禅寺に墓あり受洗の支倉忌
貴婦人の儂き命今完る
秋服は道路工事の音がする
自然薯を掘るなかばにて折れにけり
尾道は坂道ばかり彼岸花
国道はまつすぐ燕帰る日の
洪柿の根元に生えて道祖神
県道に沿うて葡萄を売るところ
木犀の匂ひ染むまで回り道
蕎麦殻のシートに落ちて熱海かな
うつすらと柚子の香のする廊下かな
廊下暗く濡らして秋の雨止まず
固茹での月が出ている退避駅

116

かい目

さっちゃんねネッ

かまち♡よろう



かまちよろう先生作新聞四コマ漫画「ゴンちゃん」が各地方新聞に掲載されています。(静岡新聞・山梨日日新聞・北日本新聞・福島民報・宮崎日日新聞・新日本海新聞・神戸新聞・岐阜新聞・中国新聞・四国新聞)



編集後記

還暦や今更戻りたくもなし

岱潤

前回、現代の僧侶について自分で考えろと投げているので、一応自分の考えを述べることにする。

昔から僧侶のなすべきこととして浄土宗では、第一清掃、第二勤行、第三学問と言われているが、私は「四苦八苦」になぞらえて、「三活九活」で整理してみた。先ず寺の住職としてなすべきことを具体的に考え、①朝の勤行、②境内の掃除、③お墓の位置の把握と考えた。清掃よりも勤行を先にしたのは、休むことを許さない点で重く考えた。お墓の場所の把握は、墓地管理者としては当たり前の

の話だ。そして心がけたいこととして、①お経の声を鍛えること、②晋字の稽古、③法話の実践だと思った。読経がすらすら出来るのは当たり前の話で、問題はその声だと思う。話し声と同じでは興ざめしてしまう。また塔婆は印刷、位牌はパソコンでは何とも悲しくなるからだ。③の法話も挨拶や思い出話ではなく、仏教の教えを話さなければ法話にならない。そして現代の僧侶としての活動で大事なことは、教化布教はもちろんであるが、あえてその教化が社会的にどのような繁栄するべきかを考え、①地域活動、②国内外への救援活動、③マイノリティへの人権活動、としたい。

雑誌『浄土』 特別・維持・賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
巖谷勝正(目黒・祐天寺)
魚尾孝久(三島・願成寺)
大江田紘義(仙台・西方寺)
加藤昌康(下北沢・森巖寺)
加藤亮哉(五反田・専修寺)
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓文(静岡・華陽院)
本多義敬(両国・回向院)
真野龍海(大本山・清浄華院)
肱博之(網代・教安寺)
水科善隆(長野・寛慶寺)
(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://jodo.ne.jp>
メールアドレス hounen@jodo.ne.jp

これらのことが私自身出来ているかと言われれば甚だ疑問である。少なくともそれを目指したいと言う思いは常にあり、言ってみれば私の努力目標だとも言える。皆さんの意見を乞う。(長)

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤
斎藤光道
佐山哲郎
青木照憲
村田洋一

浄土

八十巻十二月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成二十六年十一月二十日

発行 平成二十六年十二月一日

発行人 佐藤良純

編集人 大室了皓

印刷所 株式会社 シーティーイー

〒一〇五・〇一一

東京都港区芝公園四・七 四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三(三五七八)六九四七

FAX 〇三(三五七八)〇三三六

振替 〇〇一八・〇八・八二八七



泰雲の

文と写真

浄土真宗東京東本願寺派
光徳寺・平井泰雲尼
茶道歴30年

美味探訪

資生堂パーラー銀座本店ショップ限定 花椿ビスケット「黒缶」

光蔭如箭（こういんやのごし）。早いものでまた一年が終わろうとしています。そして、この一年お世話になった人に贈る歳暮の時期が来ました。

「歳暮は12月の下旬のうちに、親族、学び師匠、或いは病を療せし医師、他にわれに恩ありしほどの人には分に応じて物を贈りて歳暮と賀することなり」と『故事要語』に記されています。

私がお世話になった方々へ贈る東京銘品は、九段下の『坂口の京にしき』のおかきと、『資生堂パーラーの手焼き花椿ビスケット「黒缶」』です。「泰雲の美味探訪」最終回のご紹介は、後者「黒缶」です。

資生堂の初代社長・福原信三氏が考案した花椿マークのビスケットは、昭和初期からのロングセラー。それがさらに洗練されて銀座本店ショップ限定「黒缶」40枚入り4,860円になりました。発酵バター豊かな香り、北海道産の小麦粉、甜菜糖の優しい甘さ、自然で育った有精卵を使って職人が1枚1枚手作りで焼き上げた贅沢な贅沢なビスケットです。

他に気軽なお使いものの定番、24枚入りの「白缶」1,512円、48枚入りの「金缶」2,376円もあります。電話注文で発送も可能です。

資生堂パーラー銀座本店ショップ

東京都中央区銀座8-8-3 東京銀座資生堂ビル1F 03-3572-2147

営業時間 11:00～21:00 休日 無休

ありがたい今日の一日もわがいのち

めぐみたまえり天と地と人と 佐々木信綱

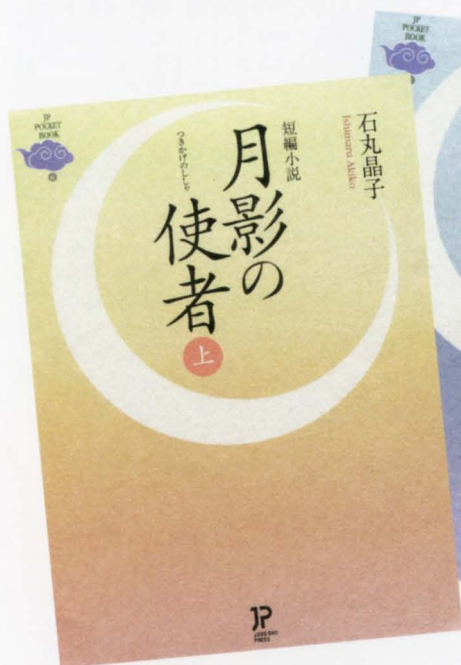
長い間、「泰雲の美味探訪」にお付き合いいただき有り難うございました。

石丸晶子先生の

本誌連載小説『法然上人を巡る人々』が

文庫本となりました。

ほとけの
慈悲は
いつの世にも、
誰のもとにも



法然。その光に出逢い、闇をこえ、
“あたらしいのち” に生きた
貴族、武士、庶民たちの物語

月影の使者 上 下

●浄土宗出版 上下巻とも本体730円＋税

【問合せ・お求め】 浄土宗出版

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4

TEL: 03-3436-3700 FAX: 03-5472-4878 <http://press.jodo.or.jp/>